

工藤 海門（くどう・かいもん）

1、プロフィール

良き友に恵まれた旧制青森中学時代、教鞭時代、大衆運動時代、闘病生活時代—それぞれの時期の「思い」を、長い宿痾との戦いの中で、歌や随筆に託した。

<生没>

1913(大正2)年10月4日 ~ 1972(昭和47)年2月2日

<代表作>

歌集『朔風去来』

随筆集『病床明迷録』

床翰集『無量哭天集』

<青森との関わり>

東津軽郡後潟村(現青森市)に生まれる。県内で教壇に立ち、のち労働運動に奔走する。

2、作家解説

大正2年10月4日、東津軽郡後潟村(現青森市)に父一(はじめ)、母はつの長男として生まれる。昭和2年県立青森中学校に入学。田沢康三郎・関野準一郎・小館善四郎・佐藤米次郎ら、よき友人に恵まれた。その思い出を、後年の歌と随筆に託した。工藤のライフステージは、教職時代、大衆運動時代、闘病生活時代の三期に分けることができるが、そのいずれの時期にも、生の燃焼と昇華が見られた。書を比田井天来らに師事して海門の雅号を使うようになる。昭和8年より教壇に立ち、のち海軍嘱託、鉄道鍊成所講師、青森管理部総務課、青森歌人協会編集同人、青鉄文芸科長、上磯クラブ会長、県地方労働委員、憲法擁護民主連盟事務局長、国鉄労働中央委員等を歴任したが、24年の参議院議員出馬を最後に政治運動から退き、食料雑貨店を営む。やがて発病し、宿痾との戦いを16年間続ける。その間、歌集『朔風去来』随筆集『病床明迷録』(昭和37年)、床翰集『無量哭天集』(昭和39年)を刊行。47年2月2日、59年の生涯を閉じる。

代表作

先生も友も信ぜず故意にして白紙答案を抛りしわれかな（『朔風去来』）
終戦の録音終わらぬに泣きわめき自刃せんとせし教官もありき（鉄道鍊成所に
て）
このことがみんなの為になるならばと妻にもいひきかせて入りし日本共産党

3、資料紹介

○歌集『朔風去来』（さくふうきょらい）

図書

1962（昭和 37）年 8 月 25 日

160mm × 120mm

「風前の燈明の軀になって、一時、一瞬の生命の貴重さを、しみじみと痛感している私は、この嘆息を、生活現実のただ中から、さいご迄ひたぶるに歌いあげようと心掛けています」という、生活苦と宿痾との闘いの果に詠みあげた短歌 714 首が収められている。